

ノルマン来寇前のイギリス民衆と宗教（Ⅰ）

藤 間 繁 義

はじめに

1910年スコットランドのエディンバラにおいて国際宣教会議（International Missionary Conference）が開催されて以来、20世紀初頭から急速に展開されて来たエキュメニカル・ムーブメントが、第二次世界大戦の後さらに急激な進展を見せて今日に至っていることは周知のことである。筆者もまたこのムーブメントに身を投じて40有余年。その間のW C C（World Council of Churches）やN C C（National Council of Churches）¹⁾、あるいはC P C（Christian Peace Conference）の活動は筆者自らその末端に関わって来たので、ut omnes unum sint²⁾という主イエスが祈り求めた教会一致の実現に着実に近付きつつあることを、身をもって把握せしめられて来た。しかもこの十数年来、日本聖公会のエキュメニズム委員に任命されて、ローマ・カトリック教会ならびにルーテル教会から選出された委員の方々と膝を交えて協議する責任を賦与されて来たので、ますます教会一致の確信を強くしているのである。

こうした中であって、エキュメニカル・ムーブメントを担って来た人々および教会教派の中で、聖公会ならびにこの教会に連なる人物による貢献の大なることは、筆者も早くから強調し、多くの識者たちの指摘して来たところでもある。これは同教会が Via Media³⁾の教会たらんとしたチャーチ・オブ・イングランドの伝統を継承することから当然のことと言わねばならぬ。事実19世紀半ばに Lambeth Conference を招集したカンタベリー大主教チャールズ・トマス・ロングリー（Charles Thomas Longley 1862～1868）⁴⁾、1910年エディンバラの国際宣教会議に先立って「すべてのキリスト教徒への

アピール」(The Appeal to All Christian People)を発して宣教師たちを
懲慚したカンタベリー大主教 ランドール・トマス・デビッドソン (Randall
Thomas Davidson 1903～1928)⁵⁾, W S C F (World Student Christian
Federation)⁶⁾ や Life and Work の活動を通して積極的にエキュメニカル・
ムーブメントに取り組み「教会が一致して新しくなるためには聖公会はその
中に消え去ってもよい」とさえ断じたウィリアム・テンプル (William
Temple 1942～1944)⁷⁾, ローマ・カトリック教会や東方正教会との交わり
を開いたジェフリー・フランシス・フィッシャー (Geoffrey Francis
Fisher (1945～1961)⁸⁾ ならびにアーサー・マイケル・ラムゼイ (Arthur
Michael Ramsey 1961～1974)⁹⁾ などのカンタベリー大主教たちのように、
今もって我々の話題の中に生き々と語られる人達を筆頭に、枚挙の暇も無
い程である。

しかしながら大陸に近く大海洋に浮かぶという点では同じような島国では
あっても、極めて古い時代からキリスト教を受容し、その歴史的変遷の過程
を経る中でキリスト教会が果たした役割や、大陸の近隣諸国との関わりといっ
た文化的土壌および歴史的、地理的諸条件は、鎖国までして孤立排他的な社
会構造の中に閉じこもっていた日本のそれとは大いに異なっており、そうし
た諸条件の中から所謂イギリス人気質なるものも培われたのである。

キリスト教史ことにイギリス教会史を学ぶ学徒として当然のことながら、
宗教改革以後今日に至るチャーチ・オブ・イングランドの歴史的歩みは、筆
者の関心措く能わざるところである。

だが、宗教改革の時代に至るまでのデーン人、アングル人やサクソン人の
侵入、その定住を経て今日の英連合王国を形づくる中心民族となったアング
ロ・サクソン¹⁰⁾ のすぐれた文化遺産、あるいは侵入と統一によって近代王
国の緒を開いたノルマン人など、多様な文化融合を遂げてきた歴史的文化的
土壌の中に、埋火のごとく横たわる「エキュメニカル・マインド」、言い換
えるならば、「協調と一致をもたらす精神」とも言うべき気風が醸成されて
きたことを意識せずにはおられない。

そのような精神的土壌の発掘解明を試みようとする関心から、筆者はさきに「英国教会の創設者たち——エキュメニカルな視点から」の研究を手掛けたのである¹⁾。さらに今年度の総合講座で筆者は「民衆と宗教と権力」なるテーマで通年講義を担当することとなり、イギリス古代の王と民衆と宗教について、僚友ならびに学生諸君とともに研鑽する機会を与えられ、深い興味とともに学んだのである。

宗教改革に至るまでのこの国は、北方諸民族による侵略侵入を繰り返し経験した後、ウィリアム征服王（William the Conqueror 1066～1087）によるイングランドへの侵入と統治によって統一王国の体制を一応整備され、強大な王権のもとに壮大華麗な聖堂伽藍の出現を見るに至ったと考えるものである。この歴史的イベントは、通常「ノルマン征服」（Norman Conquest）と称されているが、先住のイギリス民衆にとっては、あくまでも他国人による侵略以外の何ものでもない。故にウィリアム征服王こと、ノルマン公ロベールⅡ世（1035年没）の庶子ギヨーム（Guillaume）によるイギリス征服の前と後に区別して探究することから着手するのが順当であると考えるのである。また本論文の表題も上述の考えから「ノルマン征服」とはしないで、あえて「ノルマン人の来寇」なる語を使用することとした。

キリスト教伝来前の民衆と宗教儀礼

(1) 先住民たちの残した遺物

ブリテン島とその住民たちが西欧世界に初めて紹介されたのは、紀元前1世紀のローマ軍団によるこの島の占領以来とされている。

だからと言って、それ以前にはこの地に誰も住んでいなかったわけでもない。ブリテン島には、ソールズベリー近辺のストーンヘンジや、ケズウィックとかロールライト近辺に代表される古代石器時代と目される巨石や石造りの遺物があり、当時の人々の生活を暗示する古跡として、研究者や観光客のおとずれる名所となっている。

また、キリスト教伝来の歴史にしても、教皇グレゴリウスⅠ世（Gregorius

I 590～604)から派遣された聖オーガスチン (St. Augustine of Canterbury 597～604) によって、初めて正統ローマ教会の伝道がなされたが、それより5世紀も前から福音の種子はこの地に蒔かれていたのである。

こうした事情を考えるならば、この島国のもつ地理的背景について一瞥することも必要なことと考えられる。「・・・・日本はアジア大陸からはなれた一群の島国であり、イギリスはヨーロッパ大陸から離れた一群の島国である。この両国は既知の世界の最後の辺境地域であった。・・・・」とは『イギリス歴史地図』の「日本語版への序文」における編集者の言葉である¹²⁾。ユーラシア大陸を挟んで西と東の大海洋に浮かぶ、数多くの島嶼群から成るという点においては、その指摘のように共通類似するところが多々有るとはいっても、日本が大陸文化の甚大な影響を受けつつも、外部からの侵略者たちによって全国土を蹂躪されるような経験を持たないのに反して、イギリスは大陸からの侵略者たちによる度重なる占領と定住によって特異な文化を形成してきたのである。こうした大陸ならびに北方民族にとって、イギリス諸島が垂涎の好餌と見たのは、海流に乗っても狭い海峡を渡っても、なんの困難も感ずることなしに到達し得る距離にあったことが、最大の原因であったことは言うまでもないことである。

アンドレ・モーロアはその著『英国史』の冒頭に「吾人は銘記するを要する。わが国は大陸に隣ってはいるが決してその一部ではないということを。」なるボーリングブロークの言葉を引用しながら、イギリスが大陸から孤立した存在ではなくて、むしろ密接な関係をもたざるをえなかった地理的状况を次のように記している。

カレーの浜辺に立てば、ドーバーの岸の白い絶壁が見える。これは侵略者にとっての誘惑だ。それほどイギリスは大陸に近いのである。それどころか幾千年もの間、イギリスはヨーロッパと地続きであった。長いことテムズの流れはラインに注いでいたのである。氷河時代が終ってから再びイギリスに棲息するに至った動物と、その跡を追ってきた最初の獵人たちと

は、陸地伝いにヨーロッパから渡って来たものであった。・・・ヨーロッパが余りに近いため、イギリス人の思想や風俗は、純粹に島国的とは言われない。否、その島国的な性質とて、単なる自然現象ではなく、人為的な事実であるとさへ言い得るであろう。イギリスもその歴史の発端においては、他の諸国と同様に侵略されたし、それに防御の手ぎはも甚だ拙劣であった。当時におけるこの国の生業は、農業と牧畜とであった。人民は商人や船乗りよりも寧ろ牧人であり、農夫であった。・・・イギリスの最も近寄り易い部分がヨーロッパに面した南東の平野であったことは、偶然の幸福であった。若しも島の地形が反対の方向に傾斜していたならば、また若しもケルト人やスカンディナヴィアの海賊たちが、その初期の航海の折、近寄り難い山脈しか見出さなかったとしたならば、恐らく、彼等のうちあの侵入を試みる者は殆どなく、従ってまた、この国の歴史も甚だ異なったものとなっていたであろう。然るに、潮流は、風波の虞れのない入江の奥まで船を運んだ。草に覆われた石灰質の山頂は、森や沼地を避けながら島を探検することを許した。更にまた気候は、同緯度の他の土地よりも温和な湾の中にこの島があったからである。かくてこの海岸のすべての特徴は、同時に創造者でもあったあの征服者を、激励するように出来上がっていたのである。)¹³⁾

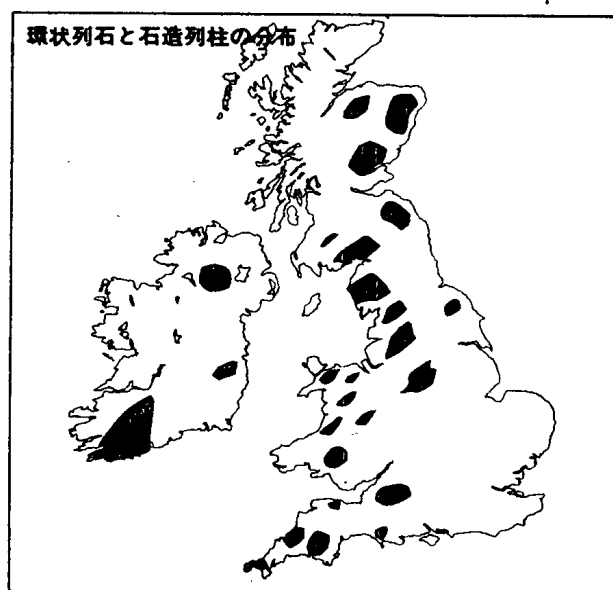
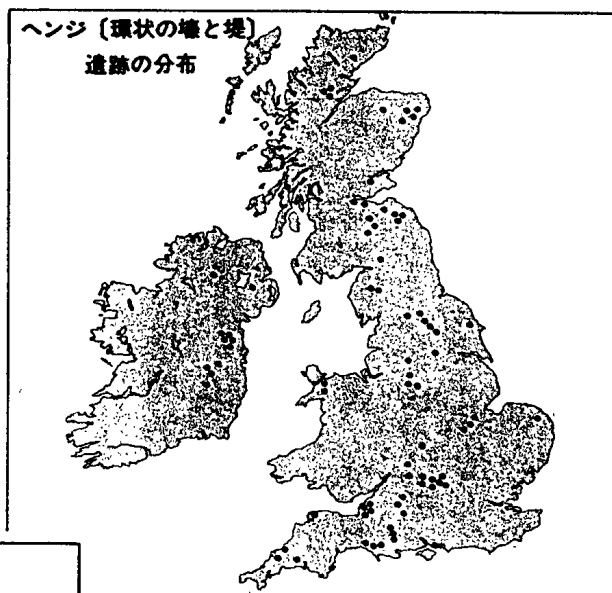
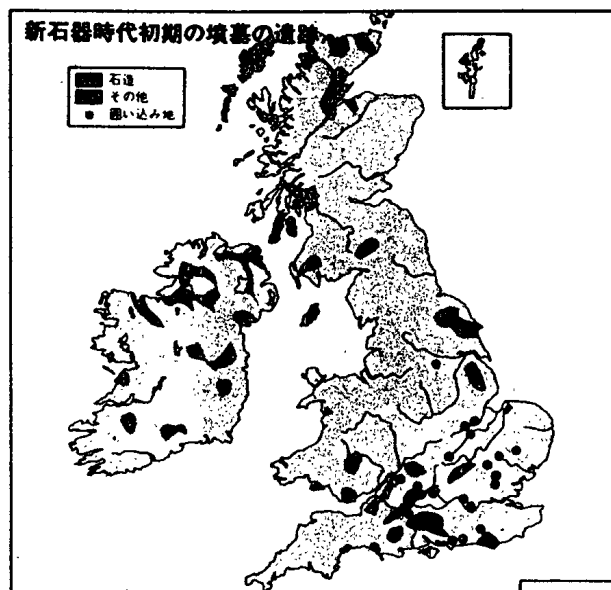
このような自然環境の中で、このブリテン島に定住していた人々の中で最も古い年代の者たちについては、全く知られていない。最初の農耕者たちがこの島に移住して来て、原始林を開拓し始めたのはBC4000年以前のある時期と推定されている。その頃は、狩猟、採集、漁労をうまく混ぜ合わせた生活を営んでいた先住の民衆の方が、新たに渡来した民族よりも、数の上では勝っていたようである。最初は河川湖沼のほとりに見出される低地が開墾され、やがて、播種、育成、収穫という穀物の栽培と、獲物を求めて山野を徘徊する狩猟から、家畜化した動物の飼育、繁殖、育成を図る牧畜、とくに牧牛を基本とする経済社会が形成された。こうした狩猟・漁労経済時代から、

飼育・栽培・農耕の経済社会へと進展して行く発展過程は、ここブリテン島においても、大陸や他の島嶼における経済社会の発展過程と同じ経過を辿るのである。前記『イギリス歴史地図』は、次ページの地図によってこの地に残されている石器時代の遺跡群の所在を示しつつ、新石器時代、前後期青銅器時代、鉄器時代へと続く間の人々の生活や営みの変遷に推定を下すのである。¹⁴⁾

今日、ブリテン島に残っている著名な遺跡はそんなに多くないけれども、それらのものは、小高い土地にあって埋没を免れておったために発見され易かったものであろう。日月星辰を崇拜する原始的宗教の聖所、もしくは、祖先とくに優れた族長か、部族の中の勇猛だった戦士の霊廟、あるいは、居住集落民の共同埋葬地だったと推察されている。上智大学のピーター・ミルワード教授によれば¹⁵⁾、シェークスピアの劇作『リヤ王』の中で、恐らく紀元前八世紀のある時期に存在したと推察されている王が叫ぶ「大洋の聖い光りをも、ヘケートの神秘をも、夜の闇をも、人間が生死の因たるあらゆる天体の動きをも……」から¹⁶⁾、古代人たちの宗教的儀礼の様態を暗示するものと考えられている。

石器時代の後期、すなはち、新石器時代ともいうべきBC3000年頃には、加工された石器のたぐいが生産されていたらしく、そうした生産物が多くの地方から発掘されており、これらの発掘物によって、生産石斧などの石器が、ある種の流通経路によって流布されていたことが推察されているし、先に触れたソールズベリー市の近くにあるストーンヘンジからも、ケズウィックやオルダーハムのストーン・サークルからも、ともにこの時代に火葬場、または、勇者などの霊廟として用いられていたことを暗示する痕跡が見出されていることは、やはり注目すべきことであろう。

時代が下がって青銅器時代に入ると金属の使用は、武具としての剣や槍などの他に、富と権力の象徴とも見受けられる豪華な装飾品や家具が造られるようになったであろうことは、当時の生活様態を示す発掘物から窺い知ることが出来る。



『イギリス歴史地図』 p. 14, 15

ストーンヘンジやストーン・サークルが、共同社会の葬送儀礼の場としてでもあれ、あるいは、個人の墳墓としてでもあれ、これを築くにあたっては、膨大な労力とともに経済的な力を要することは必然であろう。筆者は、昨年夏、インドネシアのスンバ島を訪れた折に、権力を誇示するような豪華な巨石造りの墳墓に魅せられて、どのようにしてこの巨石がここに運ばれたかについて質問した。土地の古老の話によると、「石を切り出した所からここまで運んで来るまでに十数ヶ月を費やした。村中の老若男女が使役に従事し、100ヤード進むごとに祝福の大宴会を繰り返して、ここまで運んだのさ。」との説明を受けた。おそらくはストーンヘンジでもストーン・サークルでも、数多くの人々の労働が捧げられたことであろうし、それらの人々の食事や生活の保障とでも、少ない経費で賄えるはずもない。したがって、ブリテン島におけるこの時代に、権力者のもとであれ族長のようなコミュニティ・リーダーのもとであれ、大量の石材を運搬してこのような墳墓あるいは共同葬送儀礼場を建設するための、膨大な労働量を購うだけの経済力をもつ社会が存在していたことを物語っているのである。

また、このような葬送儀礼の場と見られる遺跡から発掘された金属製の短剣や装飾品あるいは陶器の中には、それらのものを製造する原材料がブリテン島には産出していなかっただけに、青銅器時代に大陸から交易などによって持ち込まれたものと推定されるものが発見されている。そのことにより、当時の南イングランド中部の肥沃な地域には、優れて経済力豊かな社会が形成されていて、大陸との交易も盛んに行われており、当然のことながら、その富と繁栄に魅せられて移住したり、侵入して来て定住するようになった者たちのあることをも窺い知ることが出来るのである。

ルイ・カザミヤンもまた、この地に住む住民が多民族による複合的な存在であることを以下のように述べている。

イギリス国民の人種的過去は、社会的統一の過去と同じくらい非常に複雑で入り混ざったものとして現れ出ている。それはこの上なく多様な血と

文化の集まりから出来ており、大ざっぱな見解に基づいてこれまで長い間一般に創造されてきたいかなる人種にも単一には帰着し得ないだろう。われわれの推理を最も遠い淵源にまでさかのぼらせると、この国の現在の人種混合の中できわめて僅かの子孫しか残していないスペイン、フランスの大西洋岸から渡来したイベリアおよびアルプス原住民にまで辿り着くことが出来る。例えば、有名なストウンヘンジ（Stonehenge）と呼ばれるあの神聖な環列のような巨石記念物や、今なお丘の頂上に残っているいわゆる「土墳」（barrows）を築いた民族が現在われわれが知っているイギリス国土の最初の居住者である¹⁷⁾。

イギリスの歴史に関して、最も古い記述史料とも言うべき『イギリスの民衆と宗教の歴史』の中で、尊者ビードもまた「現在ではこの島は、神の法が書かれている書物の数と同じく、五種族の言語、即ちイギリス人、ブリトン人、スコット人、ピクト人の言語、及び聖書に用いられて其の他のすべての書に普遍化したラテン人の言語により、最高の真理と真の権威に関する同一の知識を探究し、獲得している。」と記して、この国の文化が、言語においても他重複合的なものであることを指摘している¹⁸⁾。

すでに概観したように、ストーンヘンジを構築した民衆より以前にこの地に定着していた人々があったことは明らかであり、ローマによる世界史への紹介以前の長い歴史と優れた文化が、この地に絢爛と咲いておったことを見逃してはならない。彼らイベリア、アルプス原住民にまで遡るガリア人、ベルガエ人をはじめ、ギリシア、ローマ、カルタゴを悩ましたケルト人さらにはスカンジナビア諸民族などによって複合した文化を築き上げた歴史の中に¹⁹⁾、後世、ホイットビー会議によるケルト教会とローマ教会の一致や、エキュメニカル・ムーブメントに貢献する綺羅星のような人材を輩出することにもなるのだから。

(2) ローマとの接触の始まり

先に述べたような先住民たちの歴史と文化を築いていたイギリスが、はじ

めてヨーロッパ史の舞台で脚光を浴びて照らし出されたのは、ローマ軍団を率いたジュリアス・シーザーによって侵略を受けた時に始まる、という表現の仕方は必ずしも過言ではない。

その後、イギリスはローマ帝国の最も西に位置する占領地として、ローマ皇帝の派遣する軍司令官によって統治される400年近くの年月の間に、キリスト教の福音も伝えられることとなる。デーン人やアングロ・サクソンの侵略によるキリスト教の苦難の時代、さらには、キリスト教化された人々によって絢爛たるアングロ・サクソン教会の花を咲かすこととなるのである。

ところでローマがこの島に目を向け始めたのは、イタリア半島から北西ヨーロッパを席卷してガリア地方に到達した時、この地へ鉄器鑄造の原材料と奴隷を供給していた南イングランドおよびブリテン島の存在に気づいたからである。そのローマ軍の侵入以前の時代にブリテン島においては、あの豊饒な開墾農地を背景に造り上げられていたウェセックス文化が消滅してしまう程の激しい変化が起こっていたことが、考古学研究の新手法の発見と学者たちの努力とによって、明らかにされている。BC1300年頃からBC650年頃までの間に、海外貿易とくに武器や装飾品など青銅製品の交易が盛んに行われており、防塁や砦を築いて防備を固めた農園や村落では、その農園システムと土地境界線をもった混合農業が盛んであったことを示す痕跡を今日まで残している。この頃には、埋葬儀礼や儀礼センターの建設も儀礼の執行も、ともに行われなくなっていたことが推定されている²⁰⁾。

ローマ軍のブリテン島侵攻はガイウス・ジュリアス・シーザーとその麾下の将兵によってなされた。ビードによれば、「ブリタニアはガイウス・ユリウス・カエサルの時代までは、ローマ人によって近寄り、知られることがなかった。彼はローマ市会創設後六九三年目、また主の御托身の時の六十年前、ルキウス・ビブルスとコンスル職に就いてから、ライン川によってわずかに隔てられていたゲルマン人、およびガリア人に対する戦いを遂行する一方、ブリタニアへは非常に近く、非常に短時間で渡ることのでき

るモリア人の地へ来た。そして約八十隻の船で軍需品と敏速な兵員を準備して、ブリタニアへ渡ったが、ブリタニアでは彼は先ず鋭い戦闘によって苦しめられ、次にはひどい暴風雨に見舞われ、艦隊の大部分と少なからぬ数の兵士、及び実際騎兵隊の殆どすべてを失った。彼はガリアに引返して軍隊を冬営に赴かせ、両途〔戦闘及び輸送に都合よい六百隻の船の建造を命じた。彼はこれらの船によって春の初めにブリタニアに渡ったが、彼自身軍を率いて敵に向かい進軍している間に、錨につながれていた船は、激しい暴風雨のために相互に衝突したり、砂上に乗り上げたりして、破壊されてしまった。これらの船の中、四十隻は破滅し、その他の船は非常な困難を以て漸く修復されたのである。カエサルの騎兵隊は、最初の戦闘でブリトン人に破られ、その際軍監ラビエヌは斬殺された。次の戦闘では彼は自軍の大損害にかかわらず、ブリトン人を破って敗走させた。それからテムズ川に向かって出発した。・・・・」²¹⁾

と、精鋭を誇るローマ軍団といえども、ブリトン人を中心勢力とするイングランド在住の諸民族の抵抗が熾烈を極めたために、上陸作戦は困難を味わうこととなった。

このビードの記すところによれば、シーザーのイギリス侵攻はBC60年ということになるのであるが、F.F. Halliday によれば

“It was an Age of Iron, though not altogether barbaric. The Celts imported the luxuries of the Mediterranean, their priests, the Druids, were the teachers and administrators of the age, and their craftsmen developed an abstract, curvilinear art that is one of the glories of western civilization. These then were the Britons, now predominantly Celtic, who in their war chariots opposed the landing of Julius Caesar and his legions in 55 and 54 BC. But Caesar's summer expeditions were a failure, and it was almost another

hundred years before the Romans came again.”²²⁾

と記しているように、シーザー軍のブリテン島来寇は、紀元前55年から54年にかけてということになる。このシーザー軍のブリテン島来寇の年代特定は、やはり近年の科学的技術の発達にともなって、放射性炭素による年代測定がなされるようになった結果として、この説を推すのが一般的傾向である。

ともあれ、シーザーの直面した予期せぬ二つの抵抗、一つは大陸の兵員を大動員して博多沖を埋め尽くす程の大船団が、一夜の大暴風に襲われ海の藻屑と消え失せた事態にも似た自然の猛威であり、いま一つはケルト人を含むブリトン人たちが勇敢に立ち向かって来たことだった。トレヴェリアンはその状況を、訓練されていないブリトンの歩兵は、「ローマ軍団の規律正しい戦闘隊」にたち向かう時はものの役に立たなかったとはいえ、金髪の筋骨たくましいケルト貴族は戦車鎌を装備した戦車に乗って、ホメロス時代の英雄のように、がらがらと音をたてながら戦場への道を走っていったのである。」と

記して、シーザーの最初の遠征が軍事的には失敗であり、ドーヴァー海峡より奥へは10マイルも進めなかった、と評している。

(3) ケルト人とその宗教ならびに生活

ブリテン島攻略にあたって、抵抗軍が勇敢に戦ってローマ軍を大いに悩ませ、英雄シーザーに強い感銘を与え、シーザーの戦記に書き残されることになったケルト人についての研究は、わが国でも漸く盛んになりつつあり、ヘルムによる『ケルト人』²³⁾や、中央大学人文科学研究所の『ケルト伝統と民俗の想像力』²⁴⁾をはじめ、論文発表も多く見受けられるようになって来ている。したがってここでは、そのヨーロッパ全域にわたるこの民族の全貌を詳らかにするのではなく、イングランドにおける彼らの特長と生活について簡単に触れて置くに止める。

ケルト人がブリテン島に移り住むようになったのは、紀元前七世紀頃から

であって、鉄器が用いられるようになった時代である。それまで青銅の武具や装飾品をガリアなど大陸からの交易によって得ていたブリトン人たちは、すでに大陸との間に人や物の交流の太いチャンネルを持っていたのだから、極めて自然なこととして起こったことなのだ。

彼らは、青銅器時代を通じて中部ヨーロッパを中心に形成された人的集団であり、コーカサス人種（白色人種）に属し、ギリシア・ゲルマン・スラブ民族とならぶ西インド・ヨーロッパ語族系の民族である。前七世紀頃からヨーロッパ全土に移動・拡大を開始し、ブリテン島にも進んだ鉄器文化によって先住民を撃ち負かしてこの島に住みついた。ブリテン島やブリトン人の名も、移住して来た彼らの中の一つ族の名に由来し、ロンドンやテムズ川の名のように今日も残っているケルトの呼称も少なくない。

当時のケルト人についての記述史料は、ギリシア人やローマ人たちの書き遺したものに限られる。彼らと戦ったシーザーによれば、

「多くの部族に分かれ、その社会は、従属的な平民と、その上に立って広い土地を所有する戦士層、および神事・天文・暦などをつかさどって大きな権威をふるう聖職者（ドルイド）の、三つの身分層からなっていたことを伝えている。後二者が貴族を形成して、牧畜を主体とする農業をいとなむ農民を支配・収奪していたのである。このほかに、貴族・首長の武勲や栄誉を歌う詩人や語り手の一団があった。文字のない時代、詩人たちによって部族の歴史や伝承が保持されたのである。またケルト人は一般に靈魂の不滅を信じ、神聖な木、森、泉、湖水などの自然物や、牛、馬、猪、熊などの動物を信仰の対象となし、彼らの主神の一つ、ルグ（別名フィンド）の名は、・・・・」²⁵⁾

ブリテン島の南西部の丘陵地帯には、中腹を二重三重の土手と溝で囲んだブリトン人の築いた丘砦（ヒル・フォート）の遺跡が多く残されている。これこそこの島に定着したケルト人たちが防備のために構築し、イングランド

の各部族の中に伝えられたもので、大規模のものは七重八重もの防塁を備えたものもある。ローマやギリシアが都市を開発して生活の場としていたのに対して、ケルト人は山野をその生活の場としておった。彼らは山野や丘陵で小部族、氏族ごとに分散して居住し、外敵の侵入や戦争などの危機にさいしては、これらの丘砦で防衛にあたった。こうした丘砦の高くて見晴らしの良いところには、堅固な防備を施した首長や貴族の居住区画が設けられていて、そこから住民を支配した権力の象徴でもあったのだ。

彼らの中の聖職者ドルイドについて、ヘルムは色々な点を指摘している。

年に一度すべてのドルイド神官は「ガリアの臍」に、事件を議し、争いを調停するために集まった。・・・・この会議の主導権は、カエサルによれば、「ドルイド神官たちの間で最も人望のある」一人の男に握られていた。彼はその同職者たちのあらゆる党派の上に立っていた、したがって首長の介入を免れたという理由からだけでも、高位聖職者のようなものだったにちがいないと言える。ドルイド神官は「通常戦争には行かず、兵役及びその他一切の仕事を免除されている」（カエサル）。そればかりか、古代アイルランドの同職者「フィリィ」と同様、領土の境界に束縛されなかったらしい。」²⁶⁾

また、

「同じようにすぐれた老人が何人も、ガリア人の宗教的首長の座を争う場合には、サエサルによれば「ドルイドの神官の投票で決せられ、時には武力で争われる場合もある」。このように、ドルイド神官たちはケルト人の社会の中で極めて重要な地位と権力を持ち、何が正しく、何が正しくないかを決定し、過去と未来や、神の恵や、年月の経過も、自然の秘密をも管理し、大学と教会と憲法裁判所を一身に兼ねる存在だとし、ケルト人民衆はカエサルの言うように「高度に宗教的であった」

と考えるのが妥当な推定である²⁷⁾。

(4) ローマ人たちが残した文化的遺産

紀元前54年、シーザーは二度目のブリタニア遠征を実施した。今回は前年のような自然の猛威を受けることもなかったし、戦略上の失敗もなかったが、それだからといって華々しい戦果を上げ得たわけでもなかった。戦利品として期待されていたブリテン島から産出される良質で有名な金は、少量しか入手できなかったし、奴隷として役立てようとする捕虜にしても、あまりにも無知だったためにローマやガリアの市場に連れて行って、法外な値段で売ることさえ出来なかった。ただ、その後起こったウェルキンゲトリックスの反乱は、シーザーに三度目の遠征を思い止まらせ、ローマの軍事力をベルガエ人のガリアとラインランドに恒久的な駐屯軍配備を優先させる結果をもたらした。²⁸⁾

一方、ローマ内部に内乱が続発し、アウグストゥスおよびティベリウスの支配下に帝国が再編成されることになるが、その御蔭でローマから遠隔の地にあるブリテン島では、約百年に及ぶ比較的平和な時代が到来することになった。

そのうえ、ジュリアス・シーザーがガリア支配を定着させたことは、彼の二回のブリテン島遠征で獲得した戦果よりも、遥かに効果的にローマの文化的影響を、ガリアと交流を持っていたブリタニア南部の諸部族に及ぼすこととなった。すなわち、南イングランドの民衆は北ガリア人と同一の民族であり、同一の政治集団に所属しておったし、そのガリア人たちは当時ローマの支配下にあり、その多くローマ市民であった。したがって、シーザーのブリテン島侵入の後、ガリア人たちは極めて自然な形でイングランドに移住を果たして、この地に多数の定住ガリア人が存在するようになった。

そうこうする間に、シーザーはブルータスその他の共同謀議によって殺され、彼の弔い合戦に勝利した甥のアントニオが皇帝アウグストと称するようになったことから、ローマは帝国として益々強大となって行ったし、その国土の片隅とも言える東の辺境ユダヤではキリストが神の国の福音を説き、その弟子たちが歴代皇帝による迫害・弾圧をものともせず宣教に従事するな

ど、時代は大きく変わりつつあった。

やがて、シーザーのブリテン島遠征後、一世紀を経てクラウディウスの遠征により、オークニー諸島をも含めて、ブリテン島全域がローマ帝国の属領に編入されることになる。²⁹⁾（実際にローマの支配が及んだのはイングランドであり、スコットランドやウェルズには占領政策や防備体制を施行することなく、後代のハドリアヌスやアントニヌスの城壁は、明らかに、イングランド守備を意図したものだった。）

皇帝クラウディウスのブリテン島攻略は、周到な計画と5万の大軍団を投入し、南イングランドの二部族、カトゥウェラウニ族とアトレバテス族の争いに乗じて、ケント南部に上陸することによって達成された。ブリタニアの最も開発の進んだ富裕の地であるテムズ川以南を領有していた兄弟、ゴドムヌスとカラタクスの率いるカトゥウェラウニ族を主力とするブリトン軍を、メドウェー川の戦いで勝利を得たローマ軍は、クラウディウスの到着を待つて被征服者の降伏を受諾した。³⁰⁾

ローマ軍は占領した地域を守護する目的のもとに、各地に城塞や砦を構築して被征服民の反乱に備えた。最初は原住民の開いた集落のある土地を選んで構築し、500人程度の補助隊を駐屯させたが、ドーセットのホッド・ヒルに構築したもののような一軍団を収容する大規模のものさえも構築されており、こうした城塞の構造については、ピーター・コンノリィの図示するところによって明確に知ることが出来る。

410年西ローマ皇帝ホノリウスが「ブリテン島放棄宣言」を発して、ローマ軍団をこの島から撤退させるまで、約400年間ローマ帝国の属州の一つとしてその支配下に置かれたイングランドは、ブリトン人の首長たちの統治に任せて、ローマ軍の司令官が全体を統括するといった方式を採用していたことは、東方の属領ユダヤにおけると同様だった。

シーザーのブリテン島遠征に始まり、クラウディウスによる占領以来三世紀にもおよぶローマン・ブリテン時代と呼ばれる時代の経過する間、ローマ人たちがこの島に残した文化的な影響は多大なものがあった。

グレコ・ローマン世界を通じて広まっていた貨幣による交換経済は、ローマ軍によるガリア征服と前後してブリテン島南部にも伝えられ、やがては、この島全域に広まって行くこととなるのである。

ケルト人たちの移住によって、ガリア南西部のアルモリカ地方が同じ血をひくブリトン人たちの土地ということから後世小ブリタニアと呼ばれるようになる程、距離的にも近い関係からこの両地方の間には密接な交通があって、青銅器がブリテン島に持ち込まれた時以来、最大の交易ルートとなっていた。したがって、ローマが征服した地方の首長や王にたいして、従属王としての地位を示し、かつ、貨幣による入貢を可能にするために、ローマ式貨幣の鋳型を贈っていたが、この鋳型から鋳造された貨幣が各地で発掘されている。これらの貨幣によって、ローマ・ケルト式貨幣が少し前の時代から流布していたケルト式貨幣にとって代わり、ブリテン島でも大いに流布していたことが知れる。

ローマ軍団の構築した城塞や砦、ことに、ハドリアヌスやアントニヌスによる長距離におよぶ防壁の建設は、イギリス建築史の上に大きな影響を与えたことは、後年「オフアの防塁」に最たる例を見ることが出来る。マーシア王オフアはその757年から40年間の治世において、防御のみならず攻撃基地としても利用しうる巨大な防塁を構築した³¹⁾。このイングランドとウェルズとの境界に築かれた「オフアの防塁」を構築するにあたって、築城法からみても、マーシアのウェルズにたいする野心を含めた戦略思想の上からも、ローマン・ウォールと呼ばれるハドリアヌスやアントニヌスの防塁構築に学ぶところ大であったことが窺われる。また皇帝や将軍の命令のもとに、膨大な人力と財力と駆使して、巨大な構築物を造り上げることは、ブリテン島でも巨石時代の遺物にも見られるところであるが、ローマ軍団の見せた組織・統制の方法、あるいは、迅速果敢な工事推進などは、後代の王城や大聖堂建築などの大建築に生かされている。

今日英語に用いられているラテン文字にしても、グレコ・ローマンの長い年月を経た後に漸く形成されたローマ・ラテン文化の所産であり、軍隊や政

治などにおける公用語は当然のことながらこの言葉が用いられた。しかしながら、このラテン語をヨーロッパ全域に広め、この国においても主要な言語として用いられるようにした功績は、ローマ・カトリック教会の宣教の賜物と言わざるをえない。

キリスト教が初めてブリテン島に伝えられた事情については、今日に至るまでも明らかにされていない。いつ頃、誰によって、どのような経路をたどって、当時「地のはて」³⁾と考えられていたこの島にまでキリスト教信仰がもたらされたのか。

シーザーの遠征以来、この島がローマ世界の一部としてその支配下に置かれたことは既に述べた。したがって、軍人を主とするローマ人はもとより、ローマ軍に伴われた軍属や奴隷たちも、多数この地に足を踏み入れた。その人々たちの中には、かつて中東の戦線に派遣されていた者、パレスチナ地方でイエスの弟子たちに出会った人たち、直接イエスの処刑に立ち会った人だって居たかも知れない。キリスト教の側では「迫害」とか「殉教」の言葉で表現されているネロを筆頭とする歴代ローマ皇帝による、徹底したキリスト教弾圧政策のもとでは、たとえ、キリスト教に改宗した者がブリテン島に来るローマ軍団の中に紛れ込んでいたとしても、その存在を特定することは極めて困難である。

但し迫害といふても紀元77年マカス・アウレリウス帝の治世に南部ガウルの大都会に行われたものの如きは別である。この時のことを見るとブリテンは大迫害の行われた南部ガウルからは海上近くもあり、それに同種族ケルト人が居住しているので、ガウルのクリスチャンのブリテン逃来は少ない数ではなかった・・・・・・・・・・³²⁾

と、山縣雄杜三が記していることから、紀元一世紀の半ばにはもうキリスト教は、確かにこのブリテン島にも伝えられていた。

ビードは、「ブリトン人の王ルキウスが、教皇エレウデルスへ書簡を送ってキリスト教徒にしてくれるよう請うたこと」(156年)、「ディオクレティア

ヌスの治世下のキリスト教徒弾圧、迫害の前に敢然として聖職者を庇って従容と死についた聖アルバヌスの殉教の状況」について記しており、迫害時代にも苛烈な弾圧にも拘わらずクリスチャンの増大は目覚ましいものがあったことを記している。

紀元313年、皇帝コンスタンチヌスが寛容勅令を發布して以来、キリスト教にたいする政策は大きく変化した。そのような状況の変化に伴って、この国におけるキリスト教会の数も飛躍的に増大していったし、ブリテン島でも同じだった。翌314年、南ガリアのアールズで開催された教会会議は、国家統治者が招集した最初の教会会議であった。この会議に参集した200余名の司教たちの中に、ロンドン、ヨークの司教と、リンカーン教区司教と推定される一人の司教が、司祭と執事とを伴って出席していたことが記録によって明らかである³⁹⁾。迫害時代、南部ブリテン島にはかなりのクリスチャンが存在しており、すでに教会組織も確立していたことが窺い知られるのである。

さらにまた、初期カトリック教会の教理問題に関する重要な問題を孕んだペラギウス論争は、ブリテン島のキリスト教が教勢の発展のみならず、神学的思索においても深いものを求めていたことを示している。言うまでもなくペラギウスは、ブリテン教会が輩出した最初の自由神学者であり、自由意志論をもって、西方教会最大の思想家アウグスチヌスと神学論争を行った論客である。人間は神の像に似せて創造された時から、完全な自由意志を与えられており、人の本性は道徳的であり、善悪いずれをも自由に選択することができるのだから、人間の墮落も教会の道徳的弛緩も、人間が神に対して自らの行為に責任をもたないからである、と主張した。人が正義を行うのは、自らが神に対する責任を意識するからであって、意志の努力によって人間は救われるし、教会も道徳的頹廃を免れる、というのである。ところが、ペラギウスの論敵アウグスチヌスの主張は、同じ自由意志を与えられた人間は、神への絶えざる服従によって罪を犯さぬようにはなるけれども、人間の本性は元来不道徳である。救いは神の恵によって与えられる、これによって人間の精神生活がはじまり、継続進歩をとげて完成される、というものであった。

アウグスチヌスの主張は *De Civitat Dei* や *De trinitate* などの著作に見られるように、徹底した三位一体の神への信仰、神与の恩寵による選びと救済を説くものであった。そして結局のところ、431年のエペソで開催された教会会議においてペラギウスの見解は斥けられ、東西両教会とも、ニケア会議で確認された三位一体の伝統的教理を保持したのである。

ちなみに、325年にニケアで開かれた教会会議には、ブリテン島の教会は代表者を派遣していなかったし、359年のアルミナム教会会議には、ブリテン司教団が旅費の自弁がかなわなかったため、国庫からの補助をうけたことが記録されていた、という点や、上記ペラギウスの自由意志論の影響を払拭するのにガリア教会の援助を求めている点などから、当時のブリテン教会は、聖職・信徒を含めて、財政的にも神学的にも、まだまだ自力旺盛とは言えない未成熟の教会だったのである。

それだからこそ、アングロ・サクソン人やデーン人たち、北方からの侵略者どもを迎えた時、方向指示の北極星として物心両面から民衆を指導すべきブリテン教会が、その輝きを見せはしなかった。アングロ・サクソン時代における、キリスト教の衰退、および、その栄光の復活と繁栄、あるいは教会建築、さらにはデンマーク王室の君臨からウィリアム征服王の登場にいたるブリテン島の、民衆と王と宗教事情については、さらに稿を改めて述べることで、紙数の関係上、本稿はここで止めることにする。

注

- 1) World Council of Churches が、各国にそれぞれ教会組織をもつキリスト教教会・教派のworld-wide organization であるのにたいして、各国における教会・教派が構成するエキュメニカル・ムーブメントのnational organization をいうが、わが国では日本基督教協議会と称する。
- 2) ラテン語聖書の中のヨハネによる福音書17章21節にあるイエスの言葉「すべての人を一つにしてください」(新共同訳聖書)は、エキュメニカル・ムーブメントにおける目標として掲げられた。同時にまた、この言葉はラテン語のままで世界学生キリスト者連盟 World Student Christian Federation (W. S. C. F. と略称

する)が発刊している季刊雑誌 The Student World のサブ・タイトルとして用いられ、青年時代からこの運動に関わってきた者たちにとっては、極めて馴染深い言葉である。

- 3) 「中道の神学」, リチャード・フッカーによって明らかにされた, ピューリタンにもカトリックにも偏らないで, 中庸を得た聖書的・神学的な立場をとる教会という意味において, 聖公会神学を指す。フッカーならびに彼の思想を継承せんとしたウィリアム・ロードの働きについては, 八代崇著「新カンタベリー物語」, 聖公会出版, 東京, 1987年, 108~110と113~117頁, アングリカニズムの形成・定着の過程については, 同書の55~122頁を参照。
- 4) 第92代カンタベリー大主教, 彼が招集した「第一回ランベス会議」については拙論「黎明期のエキュメニカル・ムーブメントにおける第一回ランベス会議の意義」, 桃山学院大学社会学論集 第3巻 第1・2合併号 別冊, 1970年3月, 参照。
- 5) 第96代カンタベリー大主教, Randal Davidson by G. K. A. Bell, Oxford University Press, 1935.
- 6) 世界学生キリスト者連盟, 学生キリスト教運動の world-wide organization であり, 国によっては Student Y. M. C. A. と称し, イギリスやカナダなどでは Student Christian Movement (S. C. M. と略称), スイスに本部を置き, わが国は日本YMCA同盟学生部と日本YWCA学生部を通じて各大学のYMCA, YWCA, SCA と連携している。
- 7) 第98代カンタベリー大主教, 拙論「ウィリアム・テンプルとエキュメニカル運動」桃山学院大学キリスト教論集第5号1969年3月。この号は『ウィリアム・テンプル特集号』として編集されたもので, 拙論の他, 下に示す諸論文を掲載している。
キリスト教神学と現代思想・・・・・・ウィリアム・テンプル著・後藤真訳
ウィリアム・テンプル博士・・・・・・八代斌助
ウィリアム・テンプルの聖餐論・・・・・・八代 崇
ウィリアム・テンプルの社会行動とその主張・・・・・・小谷春夫
ウィリアム・テンプルの「世界」と啓示論・・・・・・柳原 光
The Fourth Gospel and Temple's Religiousness・・・・・・Mark S. Oka
William Temple's Philosophy of History・・・・・・Theodore A. McConnell
ウィリアム・テンプル研究目録
- 8) 第99代カンタベリー大主教, 1949年4月, 日本聖公会宣教百年記念礼拝のため来日, 桃山学院大学開学式に臨む。八代崇著 前掲書 197~206頁。
- 9) 第100代カンタベリー大主教, 同上書 207~215頁。

- 10) ルイ・カザミヤン著, 手塚リリ子・石川京子 共訳, 「大英国」, 東京, 白水社, 13頁。
- 11) 拙論「英国教会の創設者たち——エキュメニカルな視点からの再評価——」, 桃山学院大学キリスト教論集, 第12号, 1973年3月。
- 12) マルカム・フォーカス, ジョン・ギリングム 責任編集, 中村英勝, 森岡敬一郎, 石井摩耶子 訳, 「イギリス歴史地図」, 東京書籍株式会社, 昭和58年11月, 9頁。
- 13) アンドレ・モーロア著, 水野茂夫, 浅野晃, 和田顯太郎 共訳, 「英国史」上巻, 東京, 白水社, 昭和14年11月6日 初版, 同年12月20日 7版, 21頁。
- 14) フォーカス, ギリングム著, 前掲書14頁。
- 15) Peter Milward: "CHRISTIANITY IN ENGLAND" ANNOTATED BY YOSHITAKA SAKAI, KAIBUNSHA LTD, TOKYO, 1972,9, P. 2.
- 16) 新修シェークスピア全集第三十巻 「リヤ王」, 坪内逍遙 訳, 中央公論社版, 昭和9年11月, 10頁。
- 17) カザミヤン, 前掲書29頁。
- 18) ベーダ著, 長友栄三郎訳, 「イギリス教会史」, 東京, 創文社。
- 19) 上掲書。
- 20) フォーカス, ギリングム著, 前掲書16頁
- 21) ベーダ著, 前掲書13頁。
- 22) F.E.Halliday: "A Concise History of England from Stonehenge to the Atomic Age with 223 illustrations" Thames and HUDSON, 1989, P.21.
- 23) ゲルハルト・ヘルム著, 関楠生訳「古代ヨーロッパ先住民族 ケルト人」東京, 河出書房新社, 1975。
- 24) 中央大学人文科学研究所編, 「ケルト 伝統と民族の想像力」, 研究叢書8, 東京, 中央大学出版部。
- 25) 青山吉信, 今井宏 編, 「概説イギリス史」有斐閣選書, 東京, 昭和57年4月, 15頁。26. ヘルム著, 前掲書256頁。
- 27) 上掲書258頁。
- 28) フォーカス, ギリングム著 前掲書18頁。
- 29) ベーダ著 前掲書30頁。
- 30) フォーカス, ギリングム著 前掲書20頁。
- 31) 上掲書36頁。
- 32) 山縣雄杜三著 「英国教会史」 知新書房, 東京, 昭和23年11月, 2頁。
- 33) 前掲書5頁。『イギリス歴史地図』P.14.15